

近世における出版文化の諸相

趣旨説明

(伊藤 聡)

本パネルセッションは、近代につながるメディアの問題として近世の出版文化について考えるものであった。

近年、近世の出版文化をめぐる研究が活況を呈している。キリシタン版及び朝鮮版到来のインパクトに始まる近世出版事業は、木活字から整版に移行するなかで産業として成立する。商業出版の出現は、応仁の乱以降進行していた中世「知」から近世「知」への変容にとって、有力な動力源となった。

その研究現状について整理しておく、出版物という物

伊藤 聡 引野 亨輔
吉川 裕 桐原 健真

自体については、長いあいだ日本文学及び書誌学が研究の中心であった。そこにおいては、判型・装丁・刷りなど、版本の形式についての厚い研究蓄積があり、その上に所謂「古典」をはじめとして、草子物・読本・謡本・俳諧書など文学関係の出版物に関する研究が専ら行われていた。しかし近年は、日本史・思想史・仏教史などの研究分野の参入により、仏書・儒書などの宗教思想書をはじめ、軍書・調法記・占法書・農書・医書など多様な出版物についての関心も高まりつつある。

本の移動、つまり流通と集積については、たとえば国文学研究資料館などによる全国所蔵機関の組織的な調査が進み、舶載本・和本の流通経路や、地方の素封家、あるいは

大名家・寺院等における蔵書の様相も徐々に明らかになりつつある（ただ、まだまだ数多くは未調査のままであり、本格的な書誌調査を実行した場合、一つの場所に数年、数十年の時間を要することも多く、一挙に進むものではないが）。

また、出版という営為が近世の個人と社会にどのような「知」の変革をもたらしたかについても、①商業出版により「古典」が大量に流通するようになったことによる、幅広い階層・地域に共有される「教養」の形成、また「古典」の商品化、通俗化の進行、②教授法や学問研究法の変化の結果、中世的秘書・秘伝の伝統が解体・形骸化され、いっぽう実証的学問研究が進展したこと、③学者・文人の学問という営みが、出版という営為と密接に結びつくようになったこと、④近代の「国民」意識につながる社会通念や歴史意識の醸成を促進したこと、等について注目が寄せられつつある。

このパネルセッションでは、如上の研究状況に立って、出版と近世の思想・宗教の関係について採り上げた。パネラーは引野亨輔・吉川裕・桐原健真の三氏で、引野氏は商業出版が可能にした近世寺院における仏書集積が近世の仏教知を如何に変えたのかを、吉川氏は個人の詩文集を刊行できる環境が作られたことによる文人たちの意識の変化を、桐原氏は水戸学を対象として、出版されないことの持つ政

治性の問題を扱った。以下にその発表要旨を掲げる。

経蔵のなかの正統と異端 (引野亨輔)

引野報告では、広島県福山市の大東坊（浄土真宗本願寺派）に残された蔵書を素材として、江戸時代における宗教知と商業出版の関係を考察した。

江戸時代の始めに商業出版が成立すると、村落上層農民や僧侶・神職なども盛んに書物の購読を始めた。本報告で取り上げた大東坊の場合も、檀家数三百軒ほどの中規模地方寺院ながら、大慶（一七三七―一八一八）という学僧を輩出した頃から急速に蔵書収集を進め、幕末になるとその量は約千五百部にまで及んだ。

大東坊蔵書の構成をみると、興味深いことに、西本願寺を本山と仰ぐ寺院にとって正統と呼び得る書物と、異端・異宗に属する書物とが混在している。例えば、『高田親鸞聖人正統伝』（享保二年刊）は、西本願寺ではなく専修寺を浄土真宗の総本山とみなす立場から記された親鸞伝である。また、『叢林集』（享保三年刊）は東本願寺の正統性を称揚しつつ記された寺誌である。いずれの書物も、大東坊にとって肯定したい内容を含むものといえよう。しかし、大東坊には、西本願寺の立場から書かれた『御伝照蒙

記』(寛文四年刊) などとともに、上記二書も所蔵されている。さらに、『一宗行儀抄』(正保四年刊) や『専修念仏問答鈔』(元禄五年刊) は、親鸞の著作と銘打って出版されたものだが、現在では宗祖の名を騙る偽撰の書物であったことが確定している。しかし、これらの偽書も、西本願寺お墨付きの聖教類とともに、大東坊蔵書のなかに含まれている。大慶らは、正統なる書物と異端・異宗の書物を、どのような意図で同時に収集していったのだろうか。

議論の核心へと迫る前に、まずは上記のような異端・異宗の書物が、商業出版の成立した近世社会に流布・浸透していく状況を確認しておきたい。書物が限られた知識人層によって独占されていた中世を経て、近世初期には、書物を商品として扱う本屋稼業が続々と姿を現す。ただし、彼らの商売を支える広範な読者層が始めから存在していたわけではなく、黎明期の出版業を経営安定へと導いたのは、実は大量の仏教書需要であった。徳川幕府の宗教政策に促され、仏教諸宗が僧侶養成のための檀林・学林を整備し始めると、そこで使用される「教科書」が必要となり、京坂の民間書林がその販売を請け負ったわけである。

仏教諸宗にとって精度の高い版本の確保は喜ばしい事態だったが、それは同時に、正統なる教への発信を民間書林へ委ねてしまうことにも繋がった。例えば、既出の『一宗

行儀抄』や『専修念仏問答鈔』などは、民間書林が売れることを見込み、仏教本山の許可も取らずに出版したものである。もちろん、本山サイドもただ手をこまねいてこの事態を見ていたわけではない。西本願寺学林の学僧である僧樸(一七一九―一七六二)らは、本山の要請を受けて聖教集成『真宗法要』を編纂し、浄土真宗にとって真撰の書物は何であるかを明示した。同時に僧樸は、『真宗法要蔵外諸書管窺録』を記し、『真宗法要』に所載しなかった書物(例えば『一宗行儀抄』)に対して厳しい真偽判断を加えていった。

興味深いことに、大東坊には上記の『真宗法要』も『真宗法要蔵外諸書管窺録』も所蔵されている。こうした書物によって大慶らは、ちまたに偽撰の書物があふれかえる状況を熟知していたはずである。それにも関わらず、大東坊にはなぜ幾つもの異端・異宗の書物が入り込むことになったのだろうか。大東坊蔵書に大慶が記した書き込みから、その理由を推測してみよう。例えば、『一宗行儀抄』の表紙裏には、この書物を偽撰とみなす根拠が詳細に書き込まれ、「此書ユ、シキ偽造ナリ、文ト云ヒ義ト云、毫モ祖風ニ似タル処ナシ」との結論が下されている。つまり大慶は、異端の書物であることを重々承知の上で『一宗行儀抄』を入手し、正統と異端の境界を探究すべく活用したことになる

る。

永村眞『中世寺院史料論』で述べられるように、中世の僧侶にとって聖教の所有とは、師資相承の証明そのものであった。しかし、大東坊の事例から分かるように、商業出版成立後の近世社会において、蔵書収集の意味は大きく変遷した。大慶ら近世の僧侶にとって、書物はより網羅的に収集し、その内容と比較・考証した上で、異端・異宗に対する自宗の正統性を確かめる道具となったのである。このような「考証主義」の確立に支えられ、近世寺院は蔵書収集を進めていったといえよう。

徂徠学派における詩文集刊行とその意義（吉川裕）

吉川報告では徂徠学派における詩文集刊行とその意義を、徂徠学派三世代にわたって概観した。彼らは儒学や経世済民に関わる書籍だけではなく多くの詩文集を刊行しようとしたが、それを支えるものはどのような情念であったのだろうか。そもそも近世日本において、あくまで余技に過ぎなかった漢詩文の制作を重視し、詩文集として刊行することとは徂徠学登場以前にはほとんど存在しなかったとされる。そういう意味でも荻生徂徠（一六六六―一七二八）の登場は思想史・文学史における一つの分水嶺とされてきたが、そ

の意義を「儒学から文学へ」あるいは「自我」という枠組みとは別の観点から考えてみたい。

第一世代にあたる徂徠、特に服部南郭（一六八三―一七五九）たちの古文辞学、そしてそれを駆使した文学活動の背景には、草木とともに朽ちゆく身体への忌避があり、代わりに時間と空間を越えて伝存する言葉・文字への信頼が存在していた。その際に注目される徂徠学のキーワードが『春秋左氏伝』襄公二十四年に典拠を持つ三つの「不朽」である。「不朽」は永遠に朽ちずに残る、立德・立功・立言の三つの功業（「三不朽」）を指し、「立言不朽」はとくに学問・文学の功業に対して称された。太宰春台（一六八〇―一七四七）らのような例外もいるが、徂徠をはじめとする徂徠学派の多くは立德・立功は時代的に不可能とし、立言による「不朽」によって自身の存在を後世にまで伝えることを強く望んでいた。その結果として彼らは生前没後を問わず著作の刊行を企図し、その序文や仲間同士の尺牘には「不朽」や「立言不朽」の文句が多く登場することとなる。それは自身の著作を後世に残そうとする意志が込められた「蔵之名山」（『史記』太史公自序、『漢書』司馬遷伝）というフレーズとともに、「不朽」「立言不朽」が他の学派に比べても多用されたことにも表れているだろう。

この立言によって自身の「不朽」を求める考えは次世代

にも継承された。南郭・春台ら徂徠の高弟に教えを受けた文人・学者である徂徠学派第二世代として、南郭に師事した安達清河（一七二六―一七九二）・大内熊耳（一六九七―一七七六）、春台に師事した松崎観海（一七二五―一七七六）などが挙げられる。彼らの著述や詩文集に見られる「三不朽」理解は、多くは徂徠・南郭たちのものを継承しており、精神的支柱として機能していたようだ。詩文集の刊行も、徂徠学の普及と出版文化の隆盛を受けより活発になっていく。その一方で思想・文学の両面において徂徠学批判が出現しはじめるが、中でも清田儋叟『芸苑談』（一七六八年刊）は徂徠学派の「不朽」を批判する点で注目される。一部の徂徠学者の間でも「不朽」への関心が低下するものも現れてくるように、学派としての変容や揺れが見られるようになってきていた。

最後に徂徠学派第三世代を確認した。本報告では、ほぼ同時代を生きた二人の徂徠学者、荻生金谷（一七〇三―一七七六）と熊耳に師事した伊東藍田（一七三四―一八〇九）と、観海に師事した熊阪台州（一七三九―一八〇三）を取り上げ、詩文集刊行における正反対の姿勢を紹介した。伊東藍田は江戸の人。南郭を慕い、「三不朽」理解についても南郭に忠実であったが、「立言不朽」に南郭よりも経世済民の含みを強くもたせており、その意味での文集刊行を積極的に

進めた人物であった。一方の熊阪台州は奥州伊達郡の出身。門人とともにいくつかの漢詩文の詞華集を編み、著作を通じて大田南畝（一七四九―一八二三）を始め多くの徂徠学者と交流した人物だが、思想的には晩年に徂徠学批判に転じた。その際は詩文集刊行を無用と断じ、南郭の文集刊行を批判するようになる。詩文集刊行に独特の意味を込めた徂徠学派の末流である徂徠学派第三世代のふり幅は、第二世代のそれを超えて詩文集刊行を否定するに至ったのである。そもそも草木とともに朽ち果てるを潔しとしないというある種の身体観・死生観自体は江戸期を通じて認めることができる。だが立言による「不朽」を求める徂徠学の思想と出版文化との関わりは、形而上に頼らない形で、現世における自己充足の一つ一つの在り方として評価できるだろう。彼らの詩文集刊行は、自身を後世に伝える「不朽」という価値観を軸に行われ、個人的な資質や思想的文化的な制約を受けながら継承されていった。その中で変容や断絶が生じてくるが、その背景を思想的に明らかにすることは、江戸中期から後期の身体観・死生観を考察していくことにもつながるはずである。

モノとしての書籍

——会沢正志斎をめぐる

(桐原健真)

本発表は、幕末日本において「公刊」することの思想史的意味を、「後期水戸学の大成者」と呼ばれる会沢正志斎（一七八二―一八六三）を事例に検討するものである。

会沢没直後の一八六三年、『閑聖漫録』が公刊される。

彼の弟子の石河明善は、後序で「我が会沢先生、著書殆ど棟に充つ。而して其の既に上梓し世に行はるもの数種を下らざる無し」と記している。師の著作は多い、だが世に現れていないといった認識は、その弟子たちに遺著の公刊を促したことは間違いない。

確かに会沢の著作は多いが、公刊本はその一部で、そのほとんどは晩年のものである。たとえば彼の主著とされる『新論』（一八二五）は、彼が没する六年ほど前の一八五七年（玉山堂山城屋刊）に至るまでかなわず、永らく写本や活版本で流布した。それは、『新論』のもつ政治的危険性が、大量発行が可能な版本（整版）ではなく、木活字（活版）による私的小数部な発行を選択させたからであった。

『新論』公刊以前における整版本の会沢著作としては、『迪舞篇』（一八三三刊）や『草偃和言』（一八五二刊）が挙げられる。いずれも和文の啓蒙的著作であり、水戸藩内での

地方出版であるがゆえに公刊のハードルが低かったのである。

この『草偃和言』公刊の前年には、『及門遺範』（一八五一刊）が「活版百部」という形で刊行される。これは会沢が師事した藤田幽谷の言行録であり、先師顕彰という私的な内容を基調とするものであるために活版にとどめた可能性もある。しかしこの当時の会沢が置かれた政治状況を考えるとそれだけでも言い難い。すなわち彼を含む水戸藩改革派に復権の兆しが見え始めていたこの時期に、あえて幽谷の言行録を頒布することには、先師顕彰を通じた自派糾合といった政治的意図を読み取ることができる。もとより幽谷の息子である東湖が、いまだ蟄居の身であったことを念頭に置けば、『及門遺範』を整版に付すことは難しかったであろう。

こののち六年を経て『新論』は公刊される。その背景には、一八五三年の米露両艦隊来航や徳川斉昭の海防参与就任といった時代状況があった。そしてこの『新論』の商業的成功の結果、版元の山城屋は会沢著作のさらなる公刊を企図する。『下学邇言』や『豈好弁』、『退食間話』などの公刊を持ちかけられ、会沢もまた「山城屋頗る気概の由感心」（『寺門謹宛』一八五七年八月三日）と執意を示したのである。

しかしながら、戊午の密勅問題（一八五八）や桜田門外の変（一八六〇）といった水戸藩を取り巻く政治的課題に臨み、「非常の義には、非常の御手当勿論に候」（「上書」一八六〇年二月四日）と、尊攘激派への軍事的対応をも主張した会沢には、自著公刊に取り組む余裕はなかった。このため『新論』に続く公刊は、四年の歳月を経た一八六一年のこととなる。

そのとき選ばれたのが、あの『及門遺範』（玉巖堂和泉屋刊）であった。それは「鎮派領袖」たる会沢にとって、自分こそが幽谷に始まる改革派の正統な継承者であることを改めて宣言するものであったに違いない。このように考えたとき、その最晩年に会沢著作の公刊が続いたことは、彼自身の学的関心だけではなく、その政治的党派意識をも反映していたと言える。この意味で、会沢の弟子たちが師の没後に『閑聖漫録』を公刊したことは、鎮派有司としての彼らの立場を顯示するものでもあっただろう。

門閥派と手を結び、天狗党の乱（一八六四）を鎮圧することに成功した鎮派有司は、しかしながら藩政から排除され、その地歩を失う。これが、一八六七年一〇月の『正志斎稽古雜録』に至るまで、四年にわたり会沢の著作が公刊されなかった一因であろう。やがて大政奉還・王政復古といった中央政局の影響を受けて旧天狗党が藩内で復権する

と、会沢著作の公刊は完全に停滞・沈黙する。こうして会沢は時代の彼方に消えていった。この状況が変化するには、二十年以上を経た一八九〇年代における会沢の名誉回復を俟つ必要があった。

会沢著作の公刊をめぐるこうした紆余曲折は、彼を「水戸学の大成者」といったレッテルで単純に語ることが困難であることを教えてくれる。このことは、水戸学を水戸という地域に根ざした思想言説として理解し、また会沢を八十歳歳まで生きた一儒者として、当時の思想空間のなかで再検討すべきことを示すものである。

（伊藤聡・茨城大学教授）

（引野亨輔・千葉大学准教授）

（吉川裕・東北大学専門研究員）

（桐原健真・金城学院大学教授）